

教皇パスカリス1世献堂のアプシス図像プログラムについて

—サンタ・プラッセーデ聖堂とサンタ・チェチリア聖堂の比較による考察—

竹田紘子（早稲田大学）

教皇パスカリス1世は9世紀前半の在任中、ローマに、サンタ・プラッセーデ、サンタ・マリア・イン・ドムニカ、サンタ・チェチリア・イン・トラステヴェレという3つの聖堂を献堂した。7年という在位期間に3つの聖堂を建造したことは非常に意欲的な行為であり、備品の贈与や聖堂の部分的な増築・改修がほとんどであったそれ以前の教皇たちと比較しても特異である。

従来これらの聖堂について論じられる際は、クラウトハイマーによる、聖堂プランに基づいた「ローマにおけるカロリング・ルネサンス」、つまりパスカリスの聖堂が初期キリスト教時代、特にコンスタンティヌス大帝時代の建築のリヴァイヴァルであるという見方が主流であった。そこには偉大な支配者に倣うというパスカリスの政治的意図も推測されるが、これまでの研究は建築タイプを典型的に論じることに終始し、パトロンであるパスカリスの意図は軽視されてきた。近年それに疑問を呈す研究が出始め、とりわけグッドソンはパスカリスに関する研究書の中で、クラウトハイマーの形態に偏重した分類方法を批判し、パスカリスの聖堂建築計画について、その形態に意図的に付された機能にも注目した包括的な理解が必要であると提議している。

同じことはアプシスのモザイク図像についても指摘できる。それらは既存の図像、すなわち6世紀のサンティ・コズマ・エ・ダミアーノの単純なコピーに過ぎないと理解されてきた。しかし、パスカリスの図像の中には、ローマの伝統的な構図以外に、これまで前例のない革新的な図像が融合していることを考えるならば、パスカリスは何らかの意図をもって装飾プログラムを入念に構成した可能性がある。サンタ・プラッセーデのアプシスは基本的にサンティ・コズマ・エ・ダミアーノのコピーであると言えようが、これまで同じ図像と考えられてきたサンタ・チェチリアのアプシス図には、サンティ・コズマ・エ・ダミアーノのコピーとは言えない細部が含まれているのである。

プラッセーデにはヨルダン河の表現があるが、チェチリアにはない。しかもコズマ・エ・ダミアーノでは群像がヨルダン河の手前に立っていたのに対して、プラッセーデの群像はヨルダン河の向こう側にいる。コズマ・エ・ダミアーノ及びプラッセーデでは、パウロが献堂聖者の肩に手を置き、キリストに導いていたのに対して、チェチリアでは献堂聖者がパスカリスの肩に手を置いている、という重要な違いが認められる。こうした細部を有意なものとするなら、2聖堂においてパスカリスは、自身が天上へ迎え入れられる過程を描いたのであると解釈できる。これまで6世紀の図像のコピーであると考えられてきた9世紀の2聖堂には、教皇パスカリスの、救済に対する熱望という意図が読みとれるのである。